

# 大学史料室通信

# 農大

創刊号  
2012. 6. 1

## 『大学史料室通信』発行への期待

東京農業大学・東京農業大学短期大学部 学長

大澤貫寿

本学図書館の大学史料室には、本学の歴史を知る上で貴重な歴史的文書や関係書物が数多く遺されている。これをもとに創立者榎本武揚や初代学長横井時敬に関する人物像や、本学との関係を示す書物は、東京農大出版会から出版され、多くの教職員がこれらを通して、本学の建学の意義や教育理念に関する歴史的背景は充分認識していると思われる。

一方、今年で一二一年を迎える本学の歴史は、その時代時代に関わった多くの人々の努力によって築き上げられてきた。これまでは、いくつかの時代の転換点における決断、大日本農会への移管による経営、渋谷常磐松時代、戦後の常磐松から世田谷への移転、そしてオホーツクキャンパス、厚木キャンパスの開設と、進化を繰り返して大きく発展してきた。そこには多くの人々の苦勞と、そこに至る様々な秘話があったはずである。一学科、一研究室を取り上げて、そこにも様々な



\* 正門

教育と研究の歴史的蓄積や学生生活の埋もれた伝説が時代を越え脈々と語られてきている。それらを一つひとつ掘り起こし再評価することが、これからの本学の学科、学部のある方、学生教育を考える貴重な資料となると期待され、本学の歴史を辿ることが新たな歴史を育む原点でもある。

## 大日本農会附属私立東京高等農学校の初代校長田中芳男

世田谷学術情報センター長（図書館長）

友田清彦

『東京農業大学百年史』をひもとくと、「第三章 専門学校令による東京高等農学校」に、「明治三十五年三月には、大日本農会幹事長田中芳男を招聘して、本校の校長とした」との記述がある。そこで、田中芳男の曾孫義信氏が著した『田中芳男十話・田中芳男経歴談』（二〇〇〇年、田中芳男を知る会）を見ると、「年譜」には、「明治三十五年三月一日、東京高等農学校校長（初代）を委嘱される（三十九年末まで）」と記されている。すなわち、わが東京農業大学の前身、大日本農会附属私立東京高等農学校の初代校長は田中芳男であった。田中辞任後、二代目の校長となったのが横井時敬である。

さて、田中芳男と言ってもご存じない方が多いであろう。田中芳男生誕の地、長野県飯田市にある飯田市美術博物館の常設展示解説シートの一つに、「田中芳男 一八三八〜一九一六 日本一の博物館の父」があり、その生涯と業績を簡潔にまとめている。代表的業績を端的に伝えているのが、シートの最後の頁にある「田中芳男 事始め」である。ここでは、田中が日本で最初に手がけた主な業績として、ハクサイなど輸入植物の栽培試作・亜麻の栽培とリンネルの制作（一八六五年）、西洋式昆虫標本の制作・西洋リンゴの接ぎ木（一八六六年）、サボテンの科学的研究・魚類の剥製（一八六八年）、博覧会の開催（一八七一年）、博物館（東京国立博物館と国立科学博物館の前身）の創設・書籍館（国立国会図書館の前身）の創設（一八七二年）、駒場農学校（東京大学農学部の前身）の発案（一八七

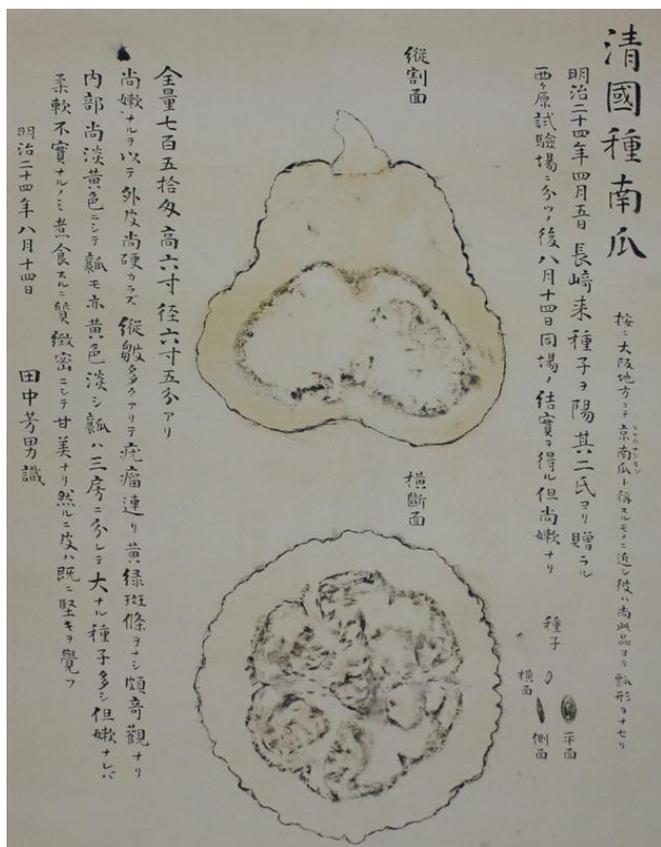


二八七二年）、駒場農学校（東京大学農学部の前身）の発案（一八七

六年)、コーヒーの木の栽培(一八七八年)、上野動物園の開設(一八八二年)、ソメイヨシノの発見(一八八五年)、田中ビワの発見(一八八八年)、農業館(伊勢市の神宮農業館の前身)の創設(一八九一年)、蒸気管使用の植物用大型温室の導入(一九〇三年)等々を挙げている。その業績がいかに多岐に亘り、歴史上意義深いものであるかがわかるであろう。また、田中には、東京農業大学図書館も所蔵する『有用植物図説』全七巻(のち目録一卷を追加)『水産名彙』『林産名彙』『教草』などの他、多くの著書・編書・訳書・監修書があり、いずれも博物学の分野では重要な学術的著述として高く評価されている。なお、東京大学総合図書館には田中の孫にあたる田中美津男が寄贈した「田中芳男文庫」があり、蔵書約六〇〇冊を所蔵している。

田中芳男は、幕末における徳川幕府の蕃書調所(東京大学の源流の一つ)物産方手伝出役を公職のスタートとして、明治維新以降は、農商務省農務局の初代局長、同省博物局長、元老院議員、大日本農会・大日本水産会・大日本山林会の幹事長・会長、勅撰の貴族院議員等々、殖産にかかわる重職を歴任し、農林水産業の振興に重要な役割を果たした。その功績により、勲一等瑞宝章が贈られ、晩年には男爵に叙せられている。

田中芳男の経歴として、関係者の間で広く知られているのは、幕末におけるパリ万国博覧会(一八六七年開催、幕府、薩摩藩、佐賀藩が出席)や、明治政府が初めて参加したウィーン万国博覧会への派遣であるが、本学と関係の深い大日本農会に関しては、一八八一年(明治十四年)五月に幹事に当選、一八八五



\* 清國種南瓜 (65cm × 48cm)



\* 有用植物圖説

年(明治十八年)二月に常置議員、同年四月幹事長に選任され、その後五期をつとめている。東京高等農学校長に在任中の一九〇二年(明治三十五年)十一月、副会頭に就任、さらに一九〇六年(明治三十九年)には名誉会員に推薦されている。一八九四年(明治二十七年)、大日本農会は有功章規程を制定したが、このとき最初に紫白綬有功章を授与されたのが田中芳男であった(以上『大日本農会百年史』による)。なお、田中芳男が農商務省の初代農務局長であったことは前述したが、大学史料室が所蔵する一八八三年(明治十六年)六月二十三日付けの横井時敬の学位記(農学士)には、駒場農学校長である関沢明清と並んで、「農務局長従五位勲五等 田中芳男」の名前が記されている。

主な参考文献(単行本のみ、他に多くの論文等がある)

- 飯田市美術博物館(一九九九)『日本の博物館の父 田中芳男』飯田市美術博物館。
- 小泉三男松(一九一四)『田中芳男氏功績書』私家版。
- 田中秀夫(二〇〇八)『田中芳男は何をした人か』田中芳男を知る会。

田中義信監修(二〇〇八)『郷土の偉人 田中芳男』田中芳男の胸像制作等を願う市民会議。

みやじましげる(一九八三)『田中芳男傳 なんじやあもんじゃあ』田中芳男・義廉顕彰会、二〇〇〇年に大空社より覆刻。

村沢武夫(一九七八)『近代日本を築いた田中芳男と義廉』田中芳男義廉顕彰会。

# 東京農業大学と鈴木梅太郎

東京農業大学名誉教授

田所 忠弘

昨年十一月二十五日、鈴木梅太郎博士ビタミンB1発見一〇〇周年祝賀事業祝典・記念シンポジウムが社団法人日本農芸化学会主催、東京大学・東京農業大学・理化学研究所他関連学会共催により東京大学安田講堂で開催され、本学理事長・学長大澤貫寿先生もそのご挨拶の中で東京農業大学と鈴木梅太郎の関係について触れられておりました。しかし、鈴木梅太郎がどれほど東京農業大学に期待を寄せ、親密な関係にあったのかについては、一般にはほとんど知られておりません。そこで、この『大学史料室通信』の紙面をお借りして、鈴木梅太郎が農学おける化学普及の必要性にどれほど力を注いでいたか、また、東京農業大学にその実践面をいかに期待していたのかについて、農大にある資料等を参考にしながら紹介したいと思います。なお、『大学史料室通信』創刊準備号に掲載した拙稿「東京農業大学図書館大学史料室に鈴木梅太郎を探る」もご参照いただければ幸いです。



## 鈴木梅太郎の先輩にあたる横井時敬との関係

横井時敬を知らずして東京農業大学を語ることはできません。一八八〇年（明治十三年）六月に駒場農学校農学

科（のち東京農林学校から帝国大学農科大学へと改称される）を卒業した横井時敬は、一八九四年（明治二十七年）に帝国大学農科大学の教授となりますが、同時に大日本農会の評議員でもありました。この時、農科大学入学生総代を務めたのが、鈴木梅太郎でした。静岡出身の梅太郎は二十歳のとき、遠江学生奨学会より、同学一年級優等として賞品を授与されていたことから、優秀な後輩として横井時敬の眼に止まっていたにちがいないと思われます。

東京農業大学の前身である大日本農会附属東京農学校（生徒数七十五〜一〇〇名、授業料一円五十銭）における、一八九七年（明治三十年）一月当時の学科担当教員を見ると、その大部分は帝国大学農科大学の教師であり、当時教頭であった横井時敬は倫理学を、講師であった鈴木梅太郎は肥料学他三科目を担当しています。教員という立場を通じて横井時敬と梅太郎はさらにお互いを知ることとなります。

一八九九年（明治三十二年）、沢野淳、古在由直、新渡戸稻造、恒藤規隆、佐藤昌介、玉利喜造、本田幸介と共に、横井時敬は我が国初の農学博士となり、一年間のドイツ留学の命令を文部省より受け、農学の勉学研究に励んでおります。その後、先輩に遅れること二年ですが、一九〇一年（明治三十四年）、二十七歳となった鈴木梅太郎も農学博士となり、横井時敬と同じくドイツ留学を果たすこととなり、農学を基礎に農芸化学の専門家として大成することになります。

一九〇七年（明治四十年）、東京帝国大学農芸化

学科の教授となった鈴木梅太郎は、有機燐化合物を分解する一種の酵素に就いて、鈴木梅太郎他連名にて『大日本農会報』第三一五号の「論説」に報告しました。同年の大日本農会の総会において、梅太郎は横井時敬、新渡戸稻造とともに総裁殿下より農芸委員を委嘱指名され、大日本農会の主たる委員の仲間入りを果たしています。

## 東京農業大学への支援

横井時敬は一九一一年（明治四十四年）十一月から一九二五年（大正十四年）五月まで東京農業大学商議員として活躍しました。他方、鈴木梅太郎も一九一三年（大正二年）九月から一九二五年（大正十四年）五月まで同じく商議員として名前を連ねていることから、東京農業大学を舞台に日本農業の今後を考



\*鈴木梅太郎先生著作書籍

えつつ、お互い農学の理念に対する理解と実践をより深めあっていたと推察できます。一九一七年（大正六年）における常盤松校舎化学実験用タンクの建設、一九二三年（大正十二

年)における教室の拡張・新築、一九二五年(大正十四年)における大学昇格のための巨額の寄付など、梅太郎は東京農業大学のためにたいへん貢献しています。

### 鈴木梅太郎ゆかりの実験室建屋とオリザニン

一九三六年(昭和十一年)、駒場のオリザニン発見にゆかりの木造平屋実験室であった旧鈴木梅太郎研究室の建物は、梅太郎の好意で渋谷常盤松の東京農業大学に寄付、移築されました。お陰で東京農業大学にもようやく関根秀三郎と住江金之が入る研究室体制が出来上った頃、社会では三共会社からオリザニン液が発売されるに至っていました。しかし、当時の医学界では脚気の原因は別にあり、よって米糠からの抽出物で脚気が治るはずはないとされていました。数々の実験から脚気の原因はオリザニンの欠乏にあり、オリザニンの投与で治ると確信していた鈴木梅太郎は、ある時、農大へ向かう途中に、友達に肩を担がれながらようやく歩いて試験に向かおうとしていた学生に出会いました。梅太郎は学生に「どうしたのか」と尋ね、試験が終了したら自分の研究室に来るようにと言いました。その学生は約束通り訪ねてきたので、オリザニンを二瓶あげ飲むようにと言って帰りました。そしてその数日後、再びその学生がお礼に訪れて来たのですが、まったくなにもなかったように歩いていたそうです。すなわち、梅太郎は自らの正しさを生活上でも証明しているのです。この「米糠の成分」の研究は、農芸化学を代表する一つの研究手法でもあり、その学問研究の流れは、今日、本学応用

生物科学部生物応用化学科に受け継がれて来ており、中でも生物化学と栄養食品化学研究室を作られた元学長鈴木隆雄先生を経て、現在は栄養生化学研究室として山本祐司教授に受け継がれるに至っているのです。

### 第三十五回榎本・横井研究会を開催

二〇一二年三月五日、東京農業大学本部四階会議室において、第三十五回榎本・横井研究会が開催されました。この研究会は、二〇〇二年十月、当時、東京農業大学学長であった進士五十八先生の提唱によつて、東京農業大学の生みの親である榎本武揚、育ての親である横井時敬という二人の学祖について、研究を深め、その業績を世に弘めようとの趣旨から設立されたものです。現在は本学総合研究所の研究会の一つという位置づけで、図書館の大学史料室を事務局として、約三十名の会員を擁し、年三〜四回ほど研究会を開いています。昨年度は新図書館棟建設のため研究会の開催も一時中断していましたが、一年近くの間をおいて、この三月に漸く研究会を再開することができました。

今回の研究会では、今後における研究会のあり方や運営について意見交換をしたほか、伊庭想太郎および横井時敬に関する会員からの情報提供があり、さらに大学史料室が所蔵し、読み下し作業を済ませた榎本武揚と横井時敬の七本の軸が披露されました。これらの史料については、今後機会があれば、『大学史料室通信』において紹介させていただきます。と思います。(友田記)

### 編集後記

『大学史料室通信』創刊号をお届けします。本号では、大日本農会附属私立東京高等農学校の初代校長であった田中芳男について紹介するとともに、前号(創刊準備号)に引き続き、田所忠弘先生に鈴木梅太郎についてご寄稿をお願いしました。紙面の制約から、前稿では梅太郎の業績等について充分に述べていただくことができなかったからです。

さて、大学史料室では、榎本武揚、横井時敬をはじめ本学関係史料の蒐集に努めるばかりでなく、多くの皆さまから貴重な史料のご寄贈をいただいております。年二回の発行を予定しているこの『大学史料室通信』を通じて、蒐集・寄贈いただいた史料を順次、紹介していきたいと考えています。

\*本文中で\*印の付いている資料は当史料室の所蔵資料です。

当史料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで、一報くだされば幸いです。

東京農業大学

世田谷学術情報センター(図書館)大学史料室  
〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話…03-54477-2526

FAX…03-54477-2639